

# 障がい福祉に農業活用 リサイクルと海水利用の営農確立

社会福祉法人 佐賀西部コロニー 中尾 富嗣

## 10年前から海水を使った農業実践

全国の地方自治体では、いま少子高齢化がますます大きな社会問題になっている。特に今年は5年に1度の国勢調査の年である。きっとこの問題の深刻さは、その結果からも明らかになるだろう。

私の暮らす佐賀県太良町は、東側は干満の差日本一の「有明海」、西側には県内でも有数の「多良岳山系」に囲まれ、長崎県との県境にある町だ。この町は、昨年に日本創生会議が発表した消滅可能性都市に指定された。人口は約9千人、3人に1人が65歳以上、更には5人に1人が75歳以上の高齢者と聞けば、みな納得する。山と海に囲まれ、自然に恵まれた町と言えば聞こえは良いが、俗にいう過疎化が進む田舎町である。山はみかん栽培、海はカニや牡蠣など第1次産業が中心としたこの町には、後継者不足などの問題により、町内には耕作放棄農地が増え、また諫早干拓問題などの影響なのか、漁業者も減少し、数十年前のような賑わいはなくなって来ている。

この高齢化が進んだ町で、私たちは10年前からすこし変わった農業に挑戦をしている。それは海水を活用した農業であり、それも町に溢れる高齢農家の皆さんと共に取り組んでいる。

今回 私たちがこの過疎化が進む町で、海水を活用した農業を通して、高齢者の方々とどのような事業に取り組んでいるのか紹介をしたい。

## 4つの福祉施設を経営

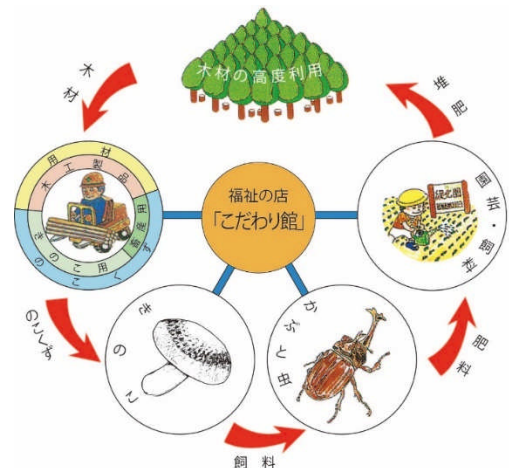
社会福祉法人佐賀西部コロニーを紹介したい。名前を聞くと疑問に感じる方がいると思うが、私たちの本業は農業ではなく、障がいをもつ方を支援する福祉施設である。

佐賀西部コロニーは、31年前の昭和59年4月に身体に障がいを持つ方が働きながら生活できる入所施設として開所した。その後、昭和63年4月に知的障がい者の入所施設、平成7年に知的障がい者の通所施設と事業を拡大していき、現在は通所型の事業所と入所型施設そしてグループホー

ムと、合計4つの福祉施設を経営している。施設には障がいを持つ約140名の方が利用をしているが、私たちは、皆さんに仕事を通して様々な支援を行っている。そして開所当初より今日まである事業に取り組んでいる。それは次に説明する循環型リサイクル事業である。

## 循環型リサイクル事業

この循環型リサイクル事業とは、①山から切り出された丸太材を購入し製材する。そして資材として活用できる部分は「木工製品」の製作をして販売する。②製材で出た端材は、鋸屑にし培地として「きのこ栽培」に活用する。ここで生産されたしいたけなどは青果市場へ出荷をする。③きのこ栽培を終えたとこの培地は廃棄物になるが、この廃棄物は腐葉土であり、カブトムシの幼虫のエサとなるため、「カブトムシの養殖」に活用する。④更にこの腐葉土が発酵し堆肥化すると、園芸作物などの「農業作業」に活用する。最終的には、すべて自然に帰るという無駄のないシステムだ。



しかし近年、この循環型リサイクル事業の過程で生産される製品の販売は、非常に厳しい状況となっている。外国産材やプラスチック材などの安価な製品に押され、木工製品の売り上げは伸び悩み、しいたけ栽培も販売先が青果市場であるため、市況により売上額は常に変動し、そして低迷した。更にカブトムシ事業は年間を通した事業収入が見

込めないなど、10年前からはこの事業の最後の砦となる園芸を中心とした事業に生き残りを掛け、取り組んでいる。周囲と同じことをしても同じ結果にしかならない。多くの障がい者の仕事を確保するため、新たな挑戦をした。それが「海水栽培農法」への取り組みである。

### こだわり農産物を目指して「海水栽培農法」

冒頭にも触れたが、この町には日本一の海「有明海」がある。そして昭和30年代までは、この有明海の干潟を乾燥させ、そのミネラル豊富な潟を堆肥として農業に利用していたそうだ。私たちはこの先代の知恵をかり、農業に復活させようとした。それも潟ではなくミネラル豊富な海水の状態を利用することを。農業従事者の方や知識豊富な方は、やめた方が良いと言う。なぜなら塩分は、植物にとって非常に悪影響を与え、塩害が起きるからだ。でもなぜ先代の農家の方は、潟を利用しても塩害にならなかったのか。それはきっと塩害のメカニズムを経験と感覚で感じ取り、栽培していたからだと思ふ。

私たちも実験を重ねながら、海水を希釈して散布するという方法で、塩害のない栽培方法を生み出した。こうして「海水みかん」という商品が誕生したのだ。その年の気候や品種にもよるが13倍程度に希釈した海水を、1本のみかんの木に約200、年間に5回程散布する。

海水を汲み上げて更に希釈して散布する作業は一般農家の方にとって大変な作業になるが、障がいを持つ多くの利用者の方がいれば可能となる。こうした作業の中で収穫された海水みかんは、普通のみかんとは比べ味わいも深く、たちまちブランド化し、多くのお客様から注文を頂くようになった。



海水を散布



ブランド化した海水みかん

### 「地域元気営農事業」へのステージへ

しかし多くの利用者の方がいても、海水散布の作業が楽になる訳ではない。みかんの栽培管理をしながら海水散布と私たちの作業にも限界がある。それに本業は農業ではない。障がいを持つ方への

支援と農作業という相反する作業の中には、常に葛藤が生まれた。しかしこんな私たちを救ってくれる救世主がこの町にいた。それも大勢である。その救世主とは農業に従事する高齢農家の皆さんである。農業は知識ではない。経験である。高齢農家の皆さんは、農業収入の減少と後継者不足、体力の低下により農業を離れる方が増えている。しかし皆さんには長年の経験がある。逆に私たちには労働力がある。こうして高齢農家の方と手を取り、日常の栽培管理は経験をもつ農家の方が担当し、私たちは必要に応じて収穫作業などを支援しながら、海水栽培についての研究を進めて海水栽培管理をする。いま委託している農産物はみかんの他、さつま芋、生姜、ジャガイモ、うりなどと増えた。そして今年度は、委託高齢農家の数は約40名であり、平均年齢は75歳、最高齢者はなんと91歳の方である。荒れ行く畑に作物が実り、高齢農家の方たちは元気になっていき、そして私たちの努力でその元気を地域に広げていく。

これが地域元気営農事業である。今年で7年目を迎えるが、課題もある。しかし課題があるからこそ改善が生まれる。これからも高齢農家の皆さんと共に手を取り合いながら町を元気で一杯にしていきたい。

### ○ 地域元気営農事業の内容

事項	内容	
システム	高齢者に生産を委託し、生産物を買取る。	
農家	参加条件	① 65歳以上を原則とする。 ② 自分の農地 又は 共同利用の農地 ③ 借入農地については 貸借が明確な農地
	肥培管理	施設との話し合いの他、収穫まで農家の責任にて行う。
施設	① 海水散布は全て 施設の農産部が行う。 ② 委託時に買い取り価格決定する。	

### 最後に

農業は「もうかるのか」と考えることがある。しかし私たちは障がいを持つ方に対して、もうけるためにしている訳ではない。困った人、支援が必要な方がいるからするのだ。農業従事者も一緒と思う。人は食べ物がないと生きていけない。そして食べ物には人を喜ばせる不思議な力がある。農業に従事されている方は、きっとそんな喜びを多くの人に届けたいと思う。福祉の心溢れる農業従事者に対し、国を挙げた支援をぜひして頂きたい。